名古屋学院大学論集　社会科学篇　第49巻　第2号　pp. 67-75

名古屋学院大学における実験動物感謝記念礼拝の取り組み

――私たちのいのちの源に目をむける礼拝の神学的考察（1）――

大　宮　有　博

はじめに

2006年に名古屋学院大学は，人間健康学部（現，リハビリテーション学部およびスポーツ健康学部）を設置した。翌年，動物実験施設の開設とともに動物実験委員会が大学に設置された。大学付きの牧師である筆者が委員の一人に指名されたのは，「実験動物の慰霊祭」の実施が念頭に置かれたためであった。

名古屋学院大学が委員会を設置したのと同じ頃，相次いで医療系学部がキリスト教主義大学に新設された。いずれの大学においても動物実験施設の設置とともに，実験動物記念礼拝が行われた[1)]。それらと名古屋学院大学の実験動物感謝記念礼拝は以下の2点において異なる。(1) この礼拝を主催したのは，宗教部委員会ではなく動物実験委員会であった。宗教部委員会では，礼拝の式文を議論した前例がなかった。しかし，新設の動物実験委員会はそういう前例に縛られなかった。このことがキリスト者ではない者とキリスト者が共に礼拝を作り上げるために議論することを可能にした。(2) この礼拝は対話の果実であった。動物実験委員会は礼拝を行うための話し合いにかなりの時間を割いたが，そこで話し合われたことは諸宗教間対話・宗教と科学の対話で扱われるテーマと並行するものが多かった。

筆者は大きな研究テーマとして，この礼拝の実践をきっかけに，動物と人間のいのちと神論をめぐる諸宗教間対話・宗教と科学の対話を試みる[2)]。全体の構想は以下のとおり。

その1（本稿）	これまでの礼拝の総括
その2	本礼拝の神学的考察
その3	動物のいのちについて聖書神学的考察

本稿の目的は，名古屋学院大学の実験動物感謝記念礼拝が何を目指したもので，どういった点がユニークかを明らかにすることにある。まず，日本における実験動物供養の背景と歴史について概観する。次に，動物実験委員会で礼拝について交わされた議論と実際の礼拝がどのようなものであったかを振り返る。

1. 実験動物の供養と慰霊の背景

中村元は「（日本では）最も進んでいる医学

1）例えば，同志社女子大学薬学部，金城学院大学薬学部。2008年3月28日に開催された日本基督教学会近畿支部会では，村瀬学氏による講演「ノアの箱舟を読み解く―人間と動物のいのち論―」が開かれた。この講演は，このような状況を意識して企画された。

2）筆者のこの大きな試みのアウトラインを，関西学院大学キリスト教と文化研究所主催のRCCミニフォーラム（2011年6月30日）において「わたしたちのいのちの源に目をむける名古屋学院大学での実験動物記念礼拝の取り組み」として発表した。

者たちでさえも，実験のために殺した動物のために慰霊祭を行う。西洋にはこういう習俗は存在しない」と述べる（中村元，1989＝1962：27）。実験動物の慰霊は，（1）宗教的観念から解放されているはずの科学者が宗教色の濃い行事を主催することや（2）慰霊の対象が動物であるということにおいて奇異な現象と言える（中村生雄，2000：271）。この「奇異な現象」と見られる実験動物慰霊祭を考えるにあたって，日本文化における供養と慰霊について見た後，岡田真美子（2010）と依田賢太郎（2000）の先行研究に依拠しながら研究者の動機を明らかにする。

1.1. 供養と慰霊

日本における実験動物に捧げる宗教儀礼を考えるにあたって，「供養」と「慰霊」の用語について述べておく。供養とは，サンスクリット語のプージャー（pūjā）の訳で，もともと〈尊敬〉を意味している。したがって，仏・宝・僧の三宝や父母・師長・亡くなったものに対して，尊敬の念から供物や供儀を捧げるのが本来の意味での供養である。日本において供養は，自分のためにいのちを終えたものに対する手向けの儀式としてある。その対象は人間だけではなく，あらゆる生き物（例：鯨，魚，蜂），さらには人形，針，入れ歯といった物までが供養の対象となる。このように，供養が仏教用語であるのに対して，慰霊は神道で用いられるものの，宗教的に中立な用語と考えられている。しかし，この言葉には，「怒りを鎮める」という意味が暗示されている。

さて，供養の対象に人間や生き物，道具が含まれる背景には，仏教の「六道輪廻」，「一切衆生悉有仏性」（いっさいしゅじょうしつうぶっしょう），「草木国土悉皆成仏」（そうもくこくどしっかいじょうぶつ）といった世界観が深く関連している。「六道輪廻」とは，この世に生きるものは六道の世界（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）に生と死を繰り返してさまよい続けるという世界観である。したがって，人間の魂と動物の魂は輪廻の別の段階にいるにすぎず，両者の霊は本質的には同じものである（伊勢田，2011：118）。「一切衆生悉有仏性」とは『大般涅槃経』に依拠する言葉で，すべて生きとし生けるものは仏になる可能性を持っているという意味である。ここから草・木・国土のように心を持たないもの（非情）も，心を持った人間（有情）と同じように成仏するという「草木国土悉皆成仏」という考え方が日本の文脈で広がる[3)]。ここに見られるのは，ヒトのいのち，動物のいのち，モノのいのちの間に質的な差異を認めない日本特有の生命観である（岡田，2010：56）。

「ヒトと動物のいのち」の間の差異を認めないという点で，名古屋学院大学の実験動物感謝記念礼拝の根底にあるいのち観は，供養のいのち観に近い。しかし，その礼拝は慰霊にも供養にもあてはまらない。なぜならその礼拝は，実験動物の霊魂を鎮めたり慰めたりするためでもなければ，実験動物の霊魂に供物・供儀を捧げるためのものでもない。そこで出てくる後述する「記念」（remembering）という概念である。

1.2. 実験動物供養の動機

動物実験を行う当事者である依田は，実験動物の供養の背景に実験者の罪意識があることを指摘する。彼の行ったアンケート調査によると，

3）この言葉は経典に出てくる言葉ではなく，9世紀の安然の『草木成仏私記』に見られる（『岩波仏教辞典』）。

71％の関係者が何らかの罪悪感・抵抗感を持つと回答した。そして，その感情の処理として選ばれたのは［供養41％，気分転換19％，懺悔8％，お浄め2％，その他28％］で，回答者の半数近い人たちが宗教的方法を選んでいる（依田，2000：268）。さらに，実験動物供養の背後に実験者の罪意識があることの根拠として，実験動物慰霊碑の碑文の具体例を挙げている[4)]。

しかし，関係者の心情はこのアンケート結果以上に複雑である。本学動物実験委員会に属す実験者は，礼拝の趣旨のなかに「罪」の概念を入れることに強い違和感を表明した（後述）。そこから考えられることは，アンケートに示される実験者の持つ罪意識は，むしろ，日本に根強く残る動物を殺す者に対する穢れ意識や動物実験反対運動といった外部からおしつけられたものであるということである。では罪意識以外に，実験者が供養を求める動機として何が考えられるであろうか。

岡田は動物の供養の背景に「いのちの遠近法」を認める。岡田によると，「日本のエコパラダイム（生命システムパラダイム）では，……いのちの尊さ，存在の価値に一般的なランク付けがあるのではなく，自分との距離，関係性によって銘々にとっての『いのちの大切さ』が量られているのである。」（岡田，2004：187）動物実験を行う動物実験委員は委員会で，**「私は実験動物を共同研究者だと思っている」**と発言した。こういう考え方が動物実験者の間に共通理解としてあるかは明らかではない。とはいうものの，動物実験者は冷淡に動物を切り刻んでいるという外部からの見方は全く違っている。むしろ，実験者は長い間，動物と関わる過程で動物を自分に身近ないのちとして捉えている。そこに実験動物を供養したいと思う動機があると考えられるというのである。

このような「供養」をめぐる岡田の考察は，実験動物のための礼拝を求める実験者の心情をある程度反映していると言える。すなわち，人間は，つねに殺生をしなければ生きていけない生の現実を「不快な真実」として受け入れなければならないのであるが，その現実にどこかで折り合いをつけ，自らのために無駄ないのちが失われることを戒めなければならない。そこで考え出された仕掛けが供養なのである（岡田，2004：176–177）。

2. 日本における実験動物の慰霊の歴史

その文化的なコンテキストで，実験動物に対する供養も早い段階で行われた。岡田の研究によると，記録に残る最初の実験動物供養は，1917年10月10日に九州大学仏教青年会が主催して博多万行寺で行われた実験動物慰霊祭である（岡田，2010：57–59）。仏教青年会は医学生有志の団体である。その際に参考にされたのはおそらく漁業関係者による魚供養ではないか

4） 吉田富三博士建立の「シロネズミの碑」：「アゾ色素肝癌，吉田肉腫，腹水肝癌などの研究に手をかけてその命を絶ちたるシロネズミの数知れず，不有会員はみな心の奥にシロネズミのあの赤い目の色を抱く。モルモット，ウサギ，ハツカネズミそのほかの鳥の類まで手にかけたる命への思いは同じ，ふと現れては行きたるこれら物言わぬ生類の幻の命も命に変わりあるべしとは思へず，あれは生ある者の命よと念じて此碑を建つ……」，三重大学の「実験動物慰霊碑」：「生きる営みを援助する業にたずさわる私達は自らの手であえてあなたの生を絶たざるを得ませんでした。『医学の進歩のため』のみでは許されない贖罪をこの地に求め，碑に印します。安らかに眠らんことを」（依田，2008.4：17）

と，岡田は推測する（岡田，2010：72n. 1）。

1970年代になるとほとんどの動物実験を行う施設が慰霊祭を行い，慰霊碑を建立するようになった。その要因として，1973年に成立した「動物の保護及び管理に関する法律」とそれに伴った動物愛護週間の制定が挙げられる（依田，2008.4：16–17）。

3. キリスト教主義大学における実験動物記念礼拝

2000年ごろからキリスト教主義大学でも「実験動物のための礼拝」を行うようになった。この頃，キリスト教主義大学に新設された医療系学部（例：同志社女子大学薬学部，金城学院大学薬学部）は，他の大学からやって来たキリスト者ではない新任教員によって構成された[5]。出身大学や前任校で当然のこととして行われていた実験動物の慰霊•供養は，動物実験者にとって論を俟たないことであった。ちなみに私が調べた限り，2000年以前から動物実験を行っていたキリスト教主義大学では，こういう礼拝をしていない[6]。

このような要望を受けて礼拝を行った宗教部や大学付き牧師に多少の躊躇があったことは，容易に推察される。躊躇の第一の要因は，シンクレティズムであろう。日本的な慣習である実験動物の「供養」をキリスト教の礼拝としてやることには，シンクレティズムの批判を受ける可能性は高い。現に，実験動物に対する礼拝の有無を電話で調査した際，ある大学のチャプレンは，**「動物には霊がありませんから，動物を慰霊する礼拝は異端的だと思います」**と筆者にきっぱり言った[7]。第二の要因は，動物実験を賛成・公認することになるのではないかということである。

こういった躊躇はあるものの，チャプレンは教員・学生に対する「牧会的配慮」としてこういった礼拝を始めたのではないだろうか[8]。ここでの配慮は教員•学生に対するものであって，実験動物に対するものは二次的なものにすぎない。筆者も当初は「牧会的配慮」として礼拝を執行することを考えた。しかし，以下の4つのめあてが議論のなかから明らかにされたことか

5） 例えば，同志社女子大学と金城学院大学は同じ2005年に薬学部を設置した。翌年から，同志社女子大学は毎年6月に「実験動物記念式」として，記念碑前で礼拝を実施している。また，金城学院大学も毎年「実験動物記念礼拝」として，チャペルでの礼拝と碑前での献花を実施している。なお，記念碑前での献花は現在行われていない。同志社大学は「実験動物慰霊式」として2007年から，京田辺校地の医心館実験動物慰霊碑前で行われている。

6） 例えば，関西学院大学は少なくとも心理学の分野で動物実験がかなり前から行われていたが，実験動物のための礼拝は行われていない。それに対して例外として，酪農学園大学は獣医学部の主催で動物記念祭を1971年から開催している。この礼拝の対象は実験動物だけではなく，動物病院で亡くなった動物が含まれる。参加者は，学生，教員，そして附属家畜病院で死亡した動物の飼い主である。この礼拝の目的は，「動物愛護」および「動物福祉の観点から畏敬と感謝を伝える」ことである。酪農学園大学，2012，酪農学園大学ホームページ（2012年9月 取 得，http://www.rakuno.ac.jp/newsold/200911/news61.html）また同大学には動物墓もある。

7） この点をめぐるキリスト教内の議論は，Birch and Vischer（1997）およびLinzay（1994）を参照せよ。

8） この見解は，牧師がいわゆる「ペット葬」を個人的に行う際にも「牧会的配慮」が用いられることから容易に類推できる。

ら，キリスト教主義学校の礼拝の重要な働きとして行った。

4.「実験動物感謝記念礼拝」の4つのめあて

ここまで我々は，実験動物に対する慰霊がどのような背景を持つかを検討した。ここでは名古屋学院大学の実験動物感謝記念礼拝のめあてを，動物実験委員会で交わされた議論を踏まえて4点に整理する。

4.1.「いのちへの畏敬」の学びの場

A. シュヴァイツァーによれば，「生きんとする意志を持つすべてのもの」に対して私たちは畏敬の念を払わねばならない。そうするとことによって，すべての「生きんとする意志を持つもの」に対して，私たちは倫理的責任を持つのである。しばしば私たちは，自分の内から，すべて生き物の生きんとする意志に対して，自分の生に対すると同様な生命への畏敬を持とうとする欲求がでてくるという経験をする。シュヴァイツァーによれば，そこに倫理の基礎があると言う。(Schweitzer，1923＝1957，312)

シュヴァイツァーは動物の痛みを覚えること（remembering）が，人と動物の距離を埋めると考える。「動物を実験動物として，その苦痛によって，病気の人間にとっての貴重なものが獲られたならば，このことによって，動物とわれわれの間には新しい独得の連帯関係がつくりだされたのである。」(Schweitzer，1923＝1957：323）動物のいのちによって人間のいのちが救われる時，私たちはその動物の苦悩を胸に刻む。そうすることによって疎遠であったものが近い存在になる。これは先に述べた「実験動物を共同研究者」とする考えや岡田の「いのちの遠近法」の考え方に通じるものがある。

このように動物のいのちを人間のいのちのように大切にすることが，人間のいのちをも大切にすることにつながる。そして，他者のいのちを自分のいのちのように大切にすることが，自分のいのちを大切にできるということにつながる。近藤によると，これが「自尊感情」につながっており，この感情こそが「いのちの教育」の原点にあると主張する（近藤，2009)。医療者の養成は，単に知識や技術の伝達だけでなく，このような「いのちの教育」も行わなければならないことは言うまでもない。実験動物感謝記念礼拝は，その「いのちの教育」の一環である。

4.2. いのちの結びつきを想起する場

「いのちは誰かの死の上に成り立っていると私は考えている。そういう意味ですべてのいのちはつながっていると思う。」動物実験委員のQ氏は委員会の席上でこう発言した。Q氏は動物実験を伴う研究を行うなかで，あるきっかけから仏教と出会い，このような直感を得た。Q氏の生命観は，動物のいのちも人間のいのちもつながっていて，違いはないというものである。また，別の委員のP氏も動物の解剖の際に，何かがマウスからふわっとあがっていくのを感じた経験を委員会で述べた。「いのちへの畏敬」の教育において，このような考え方や経験を学生と共有することは欠かせない。しかし，実験室では，このようなことを学生に語る時間がなかなか持てない。それだからこそ動物実験感謝記念礼拝は，そういう「いのちについての対話の場」を目指すのである。

P. ティリッヒが説教『自然もまた失われた善のために嘆く』で述べていることは，先のQ氏の発言に通じている。この説教のなかでティリッヒは，宇宙の神的根拠の尽きざる啓示は，宇宙のごく一部である動物のいのちにも現れて

いると述べる（Tillich，1948＝2010：108）。私たちは，技術文明や人間のプライドゆえにこのことが理解できなくなっている。このような理解を取り戻すために私たちは，自分自身の存在の根拠を自然の根拠と結び合わせなければならない（Tillich，1948＝2010：111）。

この説教の終結部分でティリッヒは，このような理解を取り戻す手段として沈黙を挙げる。

> それゆえ，自然と交われ，自然から疎外された者は自然と和解せよ，沈黙の中で自然に耳を傾けよ。そうすれば私たちは自然の心を見出すでしょう。自然はその神的根拠の栄光を奏でるでしょう。自然は悲劇の束縛の中で私たちと共にうめくでしょう。自然は破壊されることのない救いの希望を語るでしょう！（Tillich，1948＝2010：116）

実験動物感謝記念礼拝は，自分のいのちが他のいのちとの結びつきの上に成り立っていることを想起し，そのことを通して創造主の前で被造物である人間と自然とが和解する場である。そしてティリッヒが指摘するように，この想起が言葉を通してではなく，沈黙を通して行われる。

4.3. いのちに感謝しいのちを記念する場

「いのちは誰かの死の上にたっている。それゆえに，この礼拝は生きているものが死ぬいのちに対してもっと謙虚に感謝を捧げる場でもある。」Q氏は委員長として礼拝の目的をこう示した。この点は，礼拝の名称に「感謝」と「記念」という言葉が入ったことに示される。筆者は当初，礼拝の名称を他のキリスト教主義大学に倣って「実験動物記念礼拝」として委員会に提案した。提案の際に筆者は「記念」の意味を，自分たちのいのちに尊厳があるように，動物のいのちにも尊厳があることを実感し，それを強く感じ，忘れないことと説明した[9]。それに対して別の委員から，礼拝の名称に尊いいのちに感謝を捧げるという意味で「感謝」という言葉を入れてその一点を強調することが要請された。そのため，礼拝の名称は「記念感謝礼拝」となった。

4.4. 情報を開示する場

動物実験を行う機関は定期的に社会にむけて情報の開示を行わなければならない。礼拝の前に委員長より「挨拶と報告」として動物実験で飼育された動物の種類，頭数，安楽死させた動物の種類，頭数などを報告し，出席者とともに確認をする。

5.「実験動物感謝記念礼拝」の内容

前節で挙げた4つのめあてをもとに，礼拝の式文が牧師である筆者によって委員会に提案され，委員会で議論された。決定された式文は以下のとおりである。

礼拝への招き	司式者
挨拶と動物実験の概況報告	動物実験委員会委員長
前奏と燭火点灯	
讃美歌①	381（2009年），382（2010年），361（2011年）

9）スーザン・イリフ（2002）は，動物実験の3つのRである削減（reduction），代替（replacement），洗練（refinement）に加えて，記念（remembering）を加えることを提案している。伊勢田はここから日本の文脈における「供養の倫理」の可能性を提案する（伊勢田，2011：123-126）。

聖書朗読※
祈祷※
絵本投影（詩朗読）※
感謝の言葉　　学生代表，委員長
黙想
アッシジのフランシスコ「太陽の賛歌」
讃美歌②575（2009〜11年）
祝祷
後奏と燭火消灯

5.1. 聖書の言葉ともうひとつの物語の対話

礼拝実施までの議論のなかで，筆者は次のように提案した。**「……名古屋学院大学はキリスト教主義大学なので，礼拝の枠はキリスト教でやらなければならない。しかし，礼拝の中身は，宗教にこだわるよりも，学生に何を伝えたいのか，何を教えたいのかにこだわりたい。」**いのちについて話をする機会をつくることに意義があり，それは建学の精神（＝キリスト教）にもかなうのではないか。この提案以降，「礼拝の形式はキリスト教であるが，内容は誰もが共感できるものに」が実験動物感謝記念礼拝の前提となった。このように提案したのは筆者が，この礼拝を，キリスト教のいのち観をおしつける場ではなく，いのちについて語り合う場としたいと考えたからである。

このような考えから，実験動物感謝記念礼拝は，説教を中心にした「み言葉の礼拝」としてではなく，聖書の言葉と人間の言葉（詩や絵本）の並置を軸にした「対話の礼拝」として構成した。これまでの礼拝で朗読された聖書箇所等は以下のとおりである。

2009年度
詩編104篇＋谷川俊太郎「いきるということ」の朗読

2010年度
コヘレト3:18-22＋近藤薫美子『のにっき』

2011年度
詩編104＋近藤薫美子『のにっき』と得田之久『ちょう』

このような礼拝については，**「この礼拝には語りかけるメッセージがない」**という批判をキリスト者である教員から受けた。キリスト教の礼拝はメッセージを中心にしたものであるが，この礼拝では「観想」（ティリッヒが言うところの『沈黙』）が目指されている。ここでは「観想」とは，詩的な言葉や絵を通して，いのちに心をこらし，その姿を想い描こうとすることである。したがって，一方的なメッセージが排除されているのである。この点は礼拝開始前の司式者（筆者）の「礼拝の招き」のなかで触れられている。

また，キリスト教文学でもない詩や絵本をキリスト教の礼拝に持ち込んだことは，礼拝において神の言葉を相対化したという批判も想定される。しかし，これは神の言葉の相対化ではなく，神の言葉を礼拝参加者に近づけるための試みでもある。

5.2.「祈り」の言葉

礼拝で捧げられる祈りは，筆者が提案し委員会でかなりの時間をかけて議論した。最初に私が提案した祈祷文は以下のとおりである。

天地万物を支配される全能の神よ
私たちは今日，人のいのちを救うための研究にどうしても欠かすことのできない実験において，また実習において犠牲になったいのちをおぼえ，感謝の意を表すために，み前に集いました。

どうか失われたいのちをあなたが顧みて下さい。どうか，慈しみとあわれみをお与えください。
どうか私たちが，私たちのいのちが他のいのちとのつながりのなかで生かされているということをおぼえ，他のいのち，そして自分のいのちの尊厳を守る者として下さい。
どうかみ名によって建てられた名古屋学院大学に恵みを下し，教える者と学ぶ者を祝福してともに知識を深め，主の真理を悟り，謙遜な心をもって唯一の神を仰ぐことができるようにして下さい。
主イエスキリストのみ名によってお願いいたします。　　アーメン

この祈祷文案は，次のような批判と訂正が加えられた。まず,「人のいのちを救うための研究」について,**「動物実験は人の医療のためだけに行われているのではない。動物実験によって人の医療が進歩するとともに，動物の医療も確実に向上し多くの動物のいのちが救われている。」**（Q氏）という批判を受けた。そこで,「医学・医療を支えるために不可欠な研究・実習」とした。また「犠牲になったいのち」については,「犠牲」という言葉の裏には,「罪」があるが,実験者は罪を犯したことになるのか。違和感があるという意見があった。この点については,キリスト教の「罪」概念について委員会のなかで説明をしたが，理解が得られなかった。筆者は研究を行う当事者が実験においていのちにむきあうなかで感じたことが，むしろキリスト教の「罪」概念を捉えなおすことも必要なのではないかと考えた。この点は稿を改めて論じる。この時点では「犠牲になった」を「失われた」に訂正した。この訂正については,「いのちは失われるのか」という意見もあったが，結局この言葉に落ち着いた。したがって提案された祈祷文案の下線部は次のように書き換えられた。「私たちは，いのちを支えるための研究と実習において，役立ち失われたいのちを覚えて，感謝の意を表すために，み前に集いました。」

また,「天地万物を支配される全能の神よ」は,2010年度は「わたしたちのいのちの源である神よ」に変えた。2年の間に随分と委員会での議論は煮詰まり,「わたしたち」のなかに人間のいのちと動物のいのちが含まれるということは委員会の基本的な理解となったと判断できたからである。

なお2011年度の礼拝では連祷の導入を提案したところ，委員から反対された。学生が連祷に加わることで積極的に礼拝に参加していると実感してもらおうというねらいがあった。しかし,**「連祷はキリスト教に巻き込まれているような感じがする。そもそもこの礼拝はキリスト教式でやったとしても，それぞれの宗教観で弔えばよいと思っている。」「祈りの言葉をじっくり聞いて，祈りの言葉をかみしめる時間があったほうがよい。」**という理由が挙げられた。連祷は礼拝に参加していることを実感できるとして，最近，積極的に導入されている。しかし，立場が変わるとこのような否定的な意見も出てくるのである。

むすび

この礼拝は動物実験委員による継続中の実験である。委員会はこの礼拝が，動物実験を行う者が実験で失われた「いのち」を記念し，感謝を表すのにふさわしい場として，またこの礼拝があらゆる種のいのちのかけがえのなさとつながりに気づくきっかけになることを目指した。その委員会のなかで筆者は，キリスト教主義教

育の根幹が「いのち」の源である絶対的存在を敬い，生きとし生けるものを愛す人を育てることにあると考え，この礼拝を通して学生・教職員とそのことを共有することを目指した。過去3回の礼拝はこうしたねらいから外れるものではなかったと言える。

引用文献

Birch, Charles and Lukas Vischer, 1997, *Living with the Animals: The Community of God's Creatures*, Geneva: WCC Publications.（＝2004，岸本和世訳『動物と共に生きる』日本基督教団出版局.）

Iliff, Susan A, 2002, "An Additional 'R': Remembering the Animals," *ILAR Journal* 43(1), 38–47.

伊勢田哲治，2011,「動物実験の倫理―権利・福祉・供養―」『ヒトと動物の死生学―犬や猫との共生，そして動物倫理』秋山書店，107–130.

近藤卓，2009,『死んだ金魚をトイレに流すな―「いのちの体験」の共有』（集英社新書）集英社.

Linzey, Andrew, 1994, *Animal Theology*, London: SCM.（＝2001，宇都宮秀和訳『神は何のために動物を造ったのか　動物の権利の神学』教文館.）

岡田真美子，2002,「東アジア的環境思想としての悉有仏性論」『木村清孝博士還暦記念論集　東アジア仏教　―その成立と展開』春秋社.

――――，2004,「生命システムと供養」桑子敏雄編『いのちの倫理学』コロナ社，168–189.

――――，2010,「生命へのまなざし　―実験動物供養にみる東アジア的宗教感性」『感性哲学』10: 56–74.

内藤理恵子，2012,「ペットの家族化と葬送文化の変容」『宗教研究』85: 149–172.

中村元，1989；初版1962,『中村元選集［決定版］第3巻　東洋人の思惟III』春秋社.

中村元他編，2002,『岩波仏教辞典［第二版］』岩波書店。

中村生雄，2000,「『動物供養』は何のために？　―現代日本の自然認識のありか」『東北学』3: 268–279.

野口圭也，2009,「平成二十年度総合研究院研修会報告　動物供養」『真言宗豊山派総合研究院紀要』14: 163–177.

Schweitzer, Albert, 1923, *Kultur und Ethik*, Kulturphilosophie Zwieter Teil, Munich: Beck.（＝1957，氷上英廣訳『文化と倫理』［シュヴァイツァー著作集7巻］白水社.）

Tillich, Paul, 1948, *The Shaking of the Foundations*, New York: Charles Scribner.（＝2010，茂洋訳『地の基は震え動く』新教出版社.）

依田賢太郎，2000,「動物実験の倫理に関する調査研究」『東海大学紀要．開発工学部』9: 265–274.

――――，2007,『どうぶつのお墓をなぜつくるか―ペット埋葬の源流・動物塚』社会評論社.

――――，2008.1,「動物塚考1　動物の墓と慰霊碑」『Labio 21』31: 18–22.

――――，2008.4,「動物塚考2　動物実験と実験動物慰霊碑」『Labio 21』32: 16–19.

――――，2008.7,「動物塚考3　食用動物慰霊碑・素材用動物慰霊碑」『Labio 21』33: 14–17.

――――，2008.10,「動物塚考4　ペットの墓・軍用動物慰霊碑」『Labio 21』34: 20–24.

若林明彦，2005,「宗教的コスモロジーにおける神，人間，動物　―環境思想としての動物権利論と動物供養の意義」『人間環境論集』5: 45–59.